



中国四川省における大地震災害に対する国際消防救助隊（IRT-JF）の活動概要

参事官

1 地震発生～初動対応～

平成20年5月12日(月)15時28分頃(現地時間14時28分頃)中国四川省を震源地とするマグニチュード8.0(中国気象局発表)の大規模な地震が発生しました。この地震で中国四川省を中心に死者・行方不明者あわせて8万人(6月11日現在)を超える甚大な被害が発生しました。

消防庁では、地震発生当初から外務省ならびに独立行政法人国際協力機構(JICA)と連絡・協議を行い、5月15日(木)に中華人民共和国政府から我が国に対する正式な援助要請があったことを受けて、消防庁長官は直ちに国際消防救助隊の派遣を決定しました。



搜索救助活動

2 成田空港～現地へ～

国際消防救助隊17名は5月15日(木)17時に成田空港に



国際消防救助隊(IRT-JF)発隊式

集結(消防庁の集結要請から3時間弱で集結完了)国際緊急援助隊(JDR)救助チームとなる他のメンバー44名(外務省、JICA、警察庁、海上保安庁等)と合流しJDR結団式を実施後、国際消防救助隊発隊式を行いました。第1陣となるメンバー11名(総務省消防庁1名、東京消防庁5名、名古屋市消防局3名、市川市消防局2名)は同日18時29分北京へ飛び立ち、翌16日(金)13時17分には第2陣メンバー6名(東京消防庁1名、川崎市消防局3名、藤沢市消防本部2名)が成都に向けて出発しました。

3 現地での活動

被災地入りした第1陣が中国側から最初に案内された青川県関庄鎮の現場は、町全体が土砂に埋まっていたため、日本の救助チームは都市型災害救助を



得意としており、隊の規模・能力からこの現場での活動は困難である旨中国側へ申し出をし、理解を得て生存者の存在する可能性の高い同県喬庄镇へと現場を移しました。同現場では電磁波探査装置、二酸化炭素探査装置（東京消防庁が持参）を活用して徹夜で捜索救助活動を展開し、当該現場にて母子（27歳と2か月）の遺体を発見・収容し、親族に引渡すこととなりました。この際、母子の遺体に対して黙とうを捧げる日本の救助チームの姿が日本だけでなく、中国においても放映され、多くの中国国民に感動を与えることとなりました。

5月17日（土）に第2陣と合流した日本の救助チームは活動サイトを北川県曲山镇に移し、中学校倒壊現場と市内の現場との2チームに分隊して5月18日（日）早朝から捜索救助活動を開始、9時15分（現地時間）遺体を発見し中国側へ引渡したのをはじめとして、中学校倒壊現場、市内の現場の双方において最終的に14名の遺体を発見、収容しました。

5月19日（月）には、曲山镇の上流にある河川が決壊する危険性が高まったことから、14時28分北川県で地震発



増田総務大臣へ活動報告

生1週間の黙祷を実施後、活動を終了して成都まで戻り、中国側と今後の活動について調整することとなりました。同日深夜、成都に到着し中国側と調整した結果、5月21日（水）に日本の救助チームは成田へ向けて帰国することとなり、困難を極めた捜索救助活動は終了しました。

4 帰国

中国での任務を終えた国際消防救助隊17名は、5月21日（水）8時55分成田へと降り立ち、JDR解団式終了後、総務省へと移動し、増田寛也総務大臣に活動を報告しました。その後、国際消防救助隊解隊式において、村岡嗣政総括官（総務省消防庁）の活動報告、原修国際消防救助隊長（東京消防庁）から荒木慶司消防庁長官へ国際消防救助隊旗の返還が行われました。

現地ではいまだに犠牲者数が増えていますが、復興もまた始まろうとしています。犠牲になられた方々のご冥福を心からお祈りするとともに、今回の国際消防救助隊の活動が被災者支援の一助となることを願います。



国際消防救助隊解隊式